

キブツ給水塔の黒旗

キブツとアナキズム

ジオラ・メノール

これはキブツ・アルツイ（全国キブツ連合）とマパム（統一労働党）との日刊機関紙アル・ハミシュマル（見張り）の週刊版ホタム（誓約）誌（七四・一一・一五）に発表され、それをマツバ・モシェ氏がいくらか約めて英語に移されたのを、さらに少し省略訳出したものであり、筆者は上記連合に属するキブツ・ミシュマル・ハエメックのメンバーである。いま二三〇余を数えるキブツの運動体は、一〇いくつかの宗教キブツ以外、三つにわかれ、そのうちアルツイ系は、マルクス主義を標榜して社会主義シオニズムの最左翼をもって任じている。その機関誌でアナキズムの見地からのキブツ・マルクス主義批判を見るのは興味深く、その主張は、キブツ一般の構造や生活の実態からすると、他の連合のキブツにもあてはまるものとしてよいであろう。ただ惜しいのは、もともと問題外にはちがいないけれども、キブツのあり方にも影響するはずの、アラブ、パレスチナ問題がなんらふれられていないことである。

（訳者 冬川生）

今でも、「アナキズム」という言葉を聞くと、どこへでも爆弾を投げつけようとしている黒い上衣姿の者たちを想像して身震いする者がいようが、これは歴史の上ではいくらか理由のあることである。しかしアナキズム運動は、暴力と搾取を無くし、真に正しい社会を建設することを目ざす政治理論として始まり、人類の

問題に調和と平和的解決をもたらすために努力するユートピア運動だったのである。

本稿の筆者の考えるところでは、キブツとその基本原理は、事実、アナキズムの創設者たち、イギリスのウィリアム・ゴドウィン、フランスのピエールジョセフ・プルードンとその後継者たち、

ロシアのクロポトキン公爵、ドイツのユダヤ人著述家グスタフ・ランダウアーなどによって唱道された思想の実践的表現なのである。そしてキプツの原理と活動方針とは、普通そのイデオロギーの基礎とみなされているマルクス主義思想とはまさに反対のものであり、キプツ運動の発展と成功は、特にアナキズム思想家たちの考え方を背景において見ることによって初めてよく理解されるのである。

このことを正当とするには、まずアナキズムの発展を一瞥し、それが近年人々の間で着せつけられてきた奇妙な皮をはぎ取り、その原理を明確にすることがもっともよいであろう。

大多数の人々は、キプツをアナキズム組織と規定することに反対するであろうと思う。他の人たちは皮肉に、キプツの生活には確かにアナキキはあるがアナキズムはないというであろう。

しかし直接デモクラシー、職場や地位のローテーション、内面的訓練に由来し、上から押しつけられるのではない権威・権限、非利己的な労働刺戟、まったくの共同責任機構の中での最大限の相互扶助——これらすべては、私見では、アナキズム・イデオロギーの紛れもないしるしなのである。

実際、キプツのメンバーは——事實はそうでないにせよ——「自分自身の郷土」、国全体の一般的法規には従っていない土地で生活するものと感じている。このことは、キプツで盗みやこれに類することが起った場合、警官を呼ぶかがどうかがくりかえし問題にされることにも現われている。この種の議論は、実際にキプツを「法の外」におくものである。かくしてキプツは、通常は法律の強力な腕が介入する問題に対して自己流の解決方針と手段と

をもつ共同体である。

キプツは、メンバーの眼に必要な「求める組織」と見られ、したがって人々はそれを支持し、それにしっくりした感じを抱いており、アナキズムが反対する種類の「押しつけ組織」ではない。

「所有とは何か。所有とは盗みだ」とブルードンは一八四〇年に書いた。（これにアナキズムの長い歴史が始まるが、ここでは省略する。）

しかしその歴史全体を通じてアナキストたちは、スペイン内戦の短い期間を除いては、どこでも一度として、彼らの思想を部分的にさえ実現するだけの影響力をもつ立場に達することに成功しなかったのである。

奇異に思われるかも知れないが、とにかく私の見るところ、キプツ運動はアナキズム理論を実際広範囲にはつきり実践した唯一の例である。（もっともこれは、ドイツその他少数の地で共通の基盤の上にコミュニケーションを建設しようとした散発的な実験を別にしてのことである。）私がここで強調しなくてはならないのは、アナキズムの基本的見解を実現することであって、その特殊な方法についてではない。

キプツ・メルハヴィアのメンバーで、ハイファア大学政治哲学講師のアブラハム・ヤスウィルは、この問題についていま書物を書いているが、彼の見解によると、アナキズム運動は根本的な矛盾に陥っており、これがその衰退をもたらした所以であるという。

彼はこう述べている。「アナキストの眼からすると、すべての組織が人間を制限し、あらゆる政治組織が人間を抑圧する。なぜなら政党は必然的に社会組織に関するメンバーの諸見解の圧縮で

あり、それ自体メンバーに行動や見解を指示する——これはアナキズムがもつとも嫌うことだ——組織だからである。もしも政治的目的を達するためにテロ手段を用いるならば、これは党の内部で党員自身に対してもそれを用いることになる。」

……
A・D・ゴルドン（最初のキプツ・デガニアの指導者）は（一九二〇年に）プラハでマルティン・ブーバーのグスタフ・ランダウアー追悼の頌辞を聴いた。ランダウアーは、第一次大戦後の数週間、コミュニストが支配した（支配する前の）バイエルン革命政府の大臣（教育文化相）であったが、ついで革命政府が押し潰されたとき虐殺された。彼の諸著作——その中には類書中最高といわれるシェークスピア劇の講義がある——とりわけ『社会主義への呼びかけ』から、（社会主義）シオニスト青年運動（キプツを建設した人々）は影響を受けたのである。

Y・ブレンネル（社会主義シオニズム指導者の一人）もまたロンドンにいたときユダヤ人アナキストのグループとつながりがあった。興味ある歴史的な一出来事は、ルドルフ・ロッカーというドイツ人アナキストの出現である。彼はアナキズム思想のゆえにイギリス移住を余儀なくされ、イギリスのユダヤ人中心地区で活動し、イディッシュ語で書物を著わし、多くのアナキズム思想家のように文芸や芸術にも関心を抱いていた。

……
ユダヤ人たちはアナキズムの隊列で目立った役割を演じはしなかった。しかしアナキズム思想が、それと意識されない仕方では社会主義シオニズム運動、また私見ではキプツ運動におよぼした影

響をあとづけることは可能である。事実、それと意識されない仕方では活動するのが、今日にいたるまでアナキズム原理を実際に生かす唯一の方法だったのである。

……
人々はいかにして政府なしに秩序を達成することができるか。これがアナキズムの考えの基礎的問題である。ブルードンによると、強制的な法律を社会的な合意・契約にとって代えなくてはならない。包括的な集団からではなく、小さな数多くの集団から構成される社会こそは、労働の論理的配分をなしとげることができ。この体制では、彼の先駆者ゴドウィンにおけると同じく、論理——人間的知性——こそは、私的所有を認めない非強制社会建設の土台をなしている。

自発性の基礎、人間が自己の自由意志によって生活し、いかなる時にも自由にそこを去ることのできる仕組、これこそは、しかもこれのみが真に自由な社会を建設しうる基礎なのである。

キプツ社会は、実にこの原理を支持し、いかなる時にも、経済的保証を失う恐れがあるような時でさえ、それを保持してきたと主張できると思う。外部の観察者の立場からすると、キプツはしばしばその決定をメンバーに押しつけ、キプツの枠組の外で生活する人々においては「自由で」あると思われる領域でさえ、それが行なわれているように見えもしよう。しかし個々のメンバーの生活、労働、予算、食事、教育等々の決定へのキプツの介入は、常に究極的には、当事者がキプツとのつながりを断ち、キプツの基礎に含まれるブルードンの契約から離れ去る可能性に従属する。キプツ生活における責任の重さは、常にこの重荷を引受けようと

するメンバーの基本的意向を条件としている。

キプツはアナキー（無規律・無秩序）とは正反対である。むしろそれはアナキズムの実現であり、強制権力の非存在であり、これはただ自己の規律に進んで従う人々の合意によって物事を秩序立てる仕方である。プルドンの理念のいくつかが直接キプツでどの範囲まで有意義であるかに注目すべきである。たとえばプルドンは、工場の労働を感情的および知的な面でも満足のゆくものとし、かくして工場労働をそうした点で農業や芸術に等しいものたらしめる問題についても語っている。しかもこれは、キプツ工業においてデモクラシーや職場交替が論議される一〇〇年前のことである。プルドンはまた早い年令（九歳）からの農業労働を含む青少年教育のプログラムをも提起している。

アナキズム思想家たちは、ゴドウィンが説いたように、あらゆる政治組織に反対であった。彼らは理解をとおして自己の目的を達しようとした。（これは、愚かさや無知盲目に満ちた人類の歴史から判断すると弱い望みである。）しかし説得だけではアナキスト自身の眼にも空想的であるように見えた。かくしてパキニン（Pacifism）は、これを補うため、新しい路線を開始した。彼の見解では、人類の将来のための闘いの主な手段はゼネストである。労働者が彼らの労働力を雇用者への奉仕から引込めるとき、経済全体はカイド（Kaido）の家のように彼の手中で崩れ去るであろう。そこで必要なのは宣伝と、正しい歴史的瞬間に活動的指導者としてその影響力を発揮する中核グループの存在であろう。これにより、マルクスが必要と説いた確固たる中央集権タイプ（Centralized Type）の一般組織などなら必要とせず、大衆は強大な勢力となるであろう。マルクスもまた漠

然たる将来に、危機的時点に当面する革命的状況という「歴史的機会」を見たのである。

したがって事態の解決は、統治や支配の行なわれぬ、自主的に活動する小集団の存在にかかっている。これにこそ、一般将来への希望、国民的および国際的規模での革命への希望がひそんでいる。

この点でもまた、キプツ運動がそれから発展した一九二〇年代のイスラエルで道路工事に従事した人たちの集団と共通するものが見られる。キプツ運動においてもまた屋上組織（連合体）は個々の細胞、クヴツォット（小キプツ）やキプツが安定したあとで結成された。たとえば全国キプツ連合は、最初のキプツが生れてから七年後に、しかも長い討議を重ねたあとでつくられたのである。

しかしキプツ・ハメウハッド（統一キプツ連合）の母体たる労働部隊は、その各グループを中央組織の分枝と見た。今日にいたるまで統一キプツ連合の人々は彼らの中央母体をただキプツとよび、個々のキプツを母体のセトルメントとよんでいる。だが実際にはすべてのキプツ運動で連合主義の方針が採用されている。この態度は、プラグマチックな意味においてであって、予め宣伝されたイデオロギーに従ってではない。事実、中央集権化が他よりも強いのは全国キプツ連合においてもそうである。しかしこれでも当初から連合組織体としてつくられたものであって、これが各構成単位の独立性を守ることになると考えられたわけである。

ところで、スイス・ジュラの時計工たちのように、特に熟練労働

働者はより多くアナキズムに傾き、これはかのサンディカリズムに表わされている。サンディカはフランス語では職業組合を意味するが、サンディカリズムは労働者による道具、機械、その他必要な生産用具の所有を意味するが、これはまさにキプツの方式である。

もつとも、議会で提出してまだ承認されていない「キプツ法」によると、各キプツのストックの五一パーセントは連合体に所属し、もつと正確には協同組合運動の全体的親組織（キプツは、イストラエル労働組合総連合—ヒスタドルトに所属し、類似する同じ傘下の各種モシヤブのほか種々の生産、建設、運輸その他の組合とともに、全イストラエル協同組合組織の中に組みこまれている）のものであるが、現実にはメンバーのみが彼らの経済の所有者であり、事実どんな場合にもそのように感じている。

アブラハム・ヤスウールの述べたところによると、「クロポトキンやバクーニンと彼らの友人たちは財産の私有に全面的に反対し、いっさいの財産を他人から盗んだものとみなした。だが実際には彼らは、農民による農地の所有、労働者による道具の所有のような、自己に所属する『個人的所有』は認めた。」

キプツもこれと同じ見解をとっている。メンバーは彼らの共有財産以外の何物をも所有せず、この共同財産は、大アグリランダス（農工）企業を構成する場合でさえ、「個人的所有」と同様である。

これに関連して、雇傭労働の問題も明確な意味をもってくる。キプツは、メンバー以外の労働者を雇い入れるやいなや、労働者がそれで生活する彼らの「個人的所有物」は、キプツにとって基

本であるアナキズムの見解と（またマルクス主義の見解とも）まったく反する資本主義的用具に転化する。

「イストラエルにおけるシオニスト協同組合の開拓者たちが、グスタフ・ランダウアーに協同組合的細胞の建設について理論的助言を求めたことを示す資料が存在する。ランダウアーは、抑圧組織に対立する『求める組織』を指し示す方法が何であるかを説いていたのである。」このようにアブラハム・ヤスウールは説明している。そして私には、キプツ組織の形態と全国キプツ運動の活動方針とは、この説明に符合しているように思われる。

キプツの中で生活していない人たちは、時々キプツでは個人主義とキプツ主義との間に衝突がないかどうかをたずねる。キプツの用語に「自己充足」という現代語を持ち込むことは、この論議に油をそそぐことになる。

私の意見では、キプツの心構えの根底にあるアナキズム的思考態度は、基本的に個人主義的である。アナキズム的アプローチとは、個人の必要と社会全体の生活との間のギャップに橋渡しをしようとする企てであり—キプツ自体がまさにそれである。このことは、キプツの生活ではしばしば経済的福祉を犠牲にしてもメンバーの問題に大きな考慮が払われていることにも示されている。個人に対する全体のいかなる利用・搾取も行なわれないことのない保証は、いつでもキプツの枠から離れることが可能であり、個人と共同体との結合が断ち切られることにある。キプツ内の個々のメンバーの場合にもまた、諸々の委員会は「求める組織」以上のものではなく、全体の善と個人の要求との間に衝突が起るときでさえ、このことに変わりはない。キプツのメンバーたることを人に

強制することはできない。現実には強制ではなくしてキブツへの同一化であり、これは個人主義に影響するものではない。

マルクス主義とアナキズム（しかし非マルクス主義の立場をとる人たちは、私の知る限りある理由で、この恐ろしい名ではよばれなかったが）との間の歴史的論争は、キブツ・アルツィの組織上の用語にもまして、周囲の社会に対するキブツの役割に関する長期の論議に現われてきた。キブツは、資本主義社会における社会主義の細胞もしくはプロレタリア独裁後に来るべき共產主義社会の原型であるのか、それともそれ自体として正当づけられる政党または独立の団体の分枝であるのか——こうした点が、生活様式としてのキブツの基礎に本来的に存するアナキズムと、人々がそれに張りつけようとするマルクス主義というプラスターとの間の見解のちがいをなしている。

集団的イデオロギーという言葉が、キブツを非難し、これを全体主義的なものに見せる手段として用いられてきたけれども、それは実際には、キブツが農業や工業にたざざわり、またメンバーの経済的、文化的、社会的要求を満たすことだけでなく、彼らの知的、精神的な生活にかかわっていることを確認するものにほかならない。

もしもキブツ運動において、あれこれの場合除名や追放によって「統治する」企てが行なわれるならば、かかる企ては、集団的イデオロギーの名においてなされる——キブツの基礎に、それと意識されないにせよ明らかにしかも力強く存続するアナキズムの態度を否認するという犠牲を払っての——ことになる。

このことは当然にキブツを、搾取と人間による人間の支配の存

在しない、正義の協同生活の生きた細胞と見るか、それとも政治の道具、政党の細胞、その国民的および階級的機能によってまず第一に正当づけられる組織と見るかの論争であった。

政党（初めはハシヨメル・ハツアイル党、のちにはマバム党）の結成をめぐる行なわれた長い論議は、事実、マルクス主義とアナキズムとの間の論争の継続だったのである。

理論の上ではマルクス主義が勝利を収めた。キブツ・アルツィの諸キブツは理論的には政党の分枝である。しかし実際には第二の路線たる個人主義の路線が支配的であり、中央集権的構造、共産党的な権威主義的構造は、少数指導者の想像以外では存在しなかったのである。

このことは、キブツに政治的および公共的機能が存在しないというのではない。キブツは人的能力において、また先駆者または政治的目標に対する指導力において、社会的勢力の貯蔵所である。これこそはまさにアナキストが、混乱や危機のさいにこね粉のイーストたるべき彼らの「細胞」に帰属する力である。事実、このような事態は、被占領地域における人権反対デモの形で、もしくは軍隊のタンク修理工場で労働を志願するメンバーたちの形で、特に最近数週間に見ることができている。キブツの政治的な力は、時の要求に応じてそのメンバーの一部を「職業的革命家」に変えることにある。むしろ、これらすべては、キブツの確たる任務、全国土特に国境におけるユダヤ人人植地の保持につけ加えてのことである。

政党の枠がつくられたのちにも、ただ政党となるのではなく、運動としてとどまろうとする要求はなお根深く存続した。キブツ

・メンバーの中から政党で働く人たちを募ることの困難さ、メンバーの政党に対するよく知られた無関心さ、キプツと政党的政治生活との結びつき、これらは私の意見では社会的意識の弱さや知的怠惰、快樂追求の結果ではなく、キプツ生活に対する基本的にアナキズム的なアプローチと、キプツ生活にマルクス主義政党的組織方法を着せようとするその指導者たちの野望との矛盾の不可避な結果なのである。

古典的マルクス主義の見方は、まず先進諸国に起るプロレタリア革命に歴史的必然を見た。シオニズムと(パレスチナ)入植運動は、その役割をこのように予め定められたものとは認めず、その反対に、不可避的とみなされる「合理的」な歴史発展、離散先進諸国への侵入がユダヤ人問題を解決するとする発展説に反抗しようとしてきた。

開拓者たちのパレスチナ移住は、まさにアナキズム精神での「行動による宣伝」であった。といっても、破壊、殺人、扇動といったやり方ではなく、建設的積極的表現としてであった。……もし私の分析が正しく、キプツが真実アナキズム思想家たちの理念の実現であるとするならば、これから何が起るか。

これは私の考えでは言葉づかいの問題ではない。しかし間違った言葉づかいは不正確な分析と誤った結論に導くであろう。キプツを悩ませている多くの問題は、キプツ生活の目的を規定し、メンバーを活気づけている理念の正確な分析をおして解決されなければならぬ。かくしてわれわれは、その理念のうちに含まれる常に(ふつうは無意識に)キプツの基礎をなしてきたアナキズム的諸要素のもつ重要さを認めることができる。

キプツ思想のアナキズム的源泉に注意を払うことは、一般にキプツ生活、また特に若い世代の教育に見られるイデオロギーの混乱を少くすることに役立つであろう。理論上わがイデオロギー指導者たちは、いぜんとしてマルクス主義の神聖な原理にしがみついている。一七歳の高校生一人一人が、実際彼らの指導者とその言動や実態との間の、特にキプツで見られる橋渡しできない矛盾を感じている。キプツ運動の知的基礎を更新するために、ブルードン、ランダウアーとその後継者たちとの所説は改めて研究する価値がある。そこにわれわれの精神生活を豊かにし、キプツの現実とキプツを支配する公式的見解との間のギャップを縮める貴重な思想を見出すことができる。——この公式的見解なるものは、実際現実のキプツ生活から遊離し、最良のマルクス主義的説明によれば歴史のごみ捨て場に打ち捨てられるべきものである。

△定期購読者・募集中▽

隔月刊『リベロ・インターナショナル』(英文)

——アジアのアナキズム運動誌——

購読料 年間一五〇〇円(送料含)

一部 二五〇円

発行所 神戸市中央郵便局私書箱一〇六五

C I R A ・ N I P P O N 国際部